# 耕作放棄地を知ろう！

近年になって、村内に耕作放棄地が目立つようになってきた。これは阿智村だけでなく、日本全体に起こっていることであるが、背景には人口減少だけでなく、産業構造の変化などがあるといえる。

村の中の放棄地を見ると、いくつかの特徴がある。

・山間地の小面積地に多い。

・早い段階での放棄地（30 年ほど前）は放棄地に植林をしている。植林の樹種はヒノキが多い。

・近年の放棄地は文字どおりの放棄で、荒地になり、多年草・灌木が生い茂っている。

・村中心部の春日等の構造改善地の水田には無い。

放棄の理由はやむを得ない様々なものがあると思われるが、先人が開墾した時代を思うと複雑なものがある。貧弱な農機具しかなかった時代、山林の開墾は困難を極めたに違いない。その汗と血を思うと、暗澹たる気持ちになるものである。

ヒノキの植林
かつて放棄された農地。初期の耕作放棄地は何らかの木が植えられることが多かった。この畑と思われるところはヒノキが植えられていた。順調に育っているようだが、この林は間引きと枝打ちがあまり行われていないようである。

わずかに菜園がつくられている。この畑ではほとんどが耕作を放棄したようだ。わずかに野菜畑として耕作しているように思われた。

管理小屋痕
住居から離れた場所では管理するための小屋がつくられることがあった。この小屋は朽ちていた。今は車で来れば容易に着く場所だが、往時はほとんど歩いたので、このような小屋がつくられたり、出作りの建物がつくられた。

**・出作り小屋はどうなった**

　しばらく前から阿智の山道を歩いていると、耕作されなくなった農地をよく見かける。雑草が生い茂り、数年間は耕作していないと思われる農地。すっかり木が茂って、わずかに残った石垣から、かつては農地、または人家があったと思われるところもある。

**・集落から離れたところ**

　多くの場合、このような耕作放棄地は集落から離れた所にあるものだが、最近は近くでも目につく。それだけ進んでいる、または深刻になっているのだろう。

**・人口減少社会の中で**

　このようなことは少子化や核家族化といわれるようになってからの人口減少が必然的にもたらしたものといえる。

　こうした耕作放棄の農地を見て思うことは、この農地：田んぼを作った人たちのこと。重機のなかった時代、鍬一つで山林を農地に変えた人たちがいたことに思いをはせる。今だったら短時間でできる平らな土地、何日もかけて樹木を伐採し、木株や石を掘り起こして平らにしたはず。ましてや、田んぼなら近隣の沢から水を引く水路をつくった。先人の血の出るような汗水の先にできた農地。その農地をつくるのと同じような苦役や汗があってつくった豊かな社会。基盤になった科学技術も、基をたどれば安定した食糧供給があってのことだったはず。その社会がもたらす”享受”だけを頂き、先人の汗に思い至らないまま農地が山に還っていく。その姿に万感の思いを馳せることができるのは昭和の世代だけだろうか。